

シリーズ
よえもん

今も学ばれる藤樹学
～福島県喜多方市～

1670年頃の江戸時代、北方(喜多方)の矢部
鞆四郎という人が京都で藤樹の門人であった淵岡山から
藤樹学を学びました。それが会津(福島県)に入ってくるものになります。
矢部惣四郎はふる里に帰ると、さっそく五十嵐養安、遠藤謙安、東條
方香の3人に藤樹学の内容を話します。これに感動した3人も、まもなく
京都に出かけ岡山から藤樹学を学び、それを北方(喜多方)に持ち帰り関
心を持つ多くの人に教ええました。

北方(喜多方)においても、この藤樹学を勉強するのに集まったのは藤樹
の住む近江とおなじく、当時の村役人や庄屋、農民や
商人などで、一番多かったころには1000人
位の人が勉強していたともいわれています。

この勉強会は女性の参加者もいて、
身分の上下わけへだてなく平等にだれ
でもが学ぶことのできる場であり、とて
江戸時代では考えられないことであり
ました。喜多方地方では、この勉強会を
「清座」といっていました。

こうして、北方(喜多方)の藤樹学は発展することになり、北方(喜多方)
の人の気質や文化にも大きな影響をあたえました。

今も喜多方市の小学生たちは、喜多方市で作られた副読本をもとに、
藤樹や藤樹学を学んでいます。＝出典 先人からの贈りもの 喜多方市教育委員会＝

* 記念館だより *

ようやく雪も溶け、(早)のぼか(と)暖かい日が続くようになってきました。記念
館周辺の木々にも花の蕾(つぼみ)がうきはじめ、春のおとずれを感じます。3月
8日には立志祭が行われ、たくさんの小学生の人たちが記念館
を訪れてくれました。来年度も記念館へのご来館を職員一同、
いよいよお待ちしております。



「論語」微子第一八

書、洲田瑞穂さん

可も無く 不可も無し

「可もなく不可もなし」とは、
特に良くもないし悪くもないという、
意味で用いられていますが、「論語」
の中では、字義は次のような意味
で使っています。
「荷事(に)対しても取組む前に、で
きるできない、自分に向く向か
ない、やっても無駄、苦しうた、楽
しうた(と)よと一逆(さか)倒(た)ではなく、
行動(こうどう)して(して)から道義(どうぎ)に従(したが)って
進退(しんたい)することだ。』